かぐや姫が月に還った日は？

作花一志

「今は昔，竹取の翁といふ者ありけり」で始まる『竹取物語』は，竹の中から生まれたかぐや姫がお爺さんお婆さんに富をもたらし，十五夜の月に還っていくという誰もが知っているお話ですね。しかし実はこれ，童話でも SF でもなく反権力風刺小説なのです。原本は残っておらず，成立年・作者とも不明ですが『源氏物語』に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」という文章があることから平安初期の作品であることは確かです。問題はかぐや姫に求婚する 5 人の公達で，そのうちの 3 人，阿倍御主人（あべのみうし 635－703：右大臣），大伴御行(おおとものみゆき 646－701：大納言)，石上麻呂（いそのかみのまろ 640－717：左大臣）は古代律令制が成立した飛鳥朝廷の高官です。阿倍御主人の子孫には安倍晴明がいるし，大伴御行はもちろん大伴氏で，石上麻呂は物部氏の末裔です。また石作皇子（いしづくりのみこ)のモデルは多治比嶋（624－701：左大臣），車持皇子（くらもちのみこ）のモデルはなんと藤原不比等（659－720：右大臣）であることが，江戸時代からの研究でほぼ確定しています。かぐや姫はこの 5 人の公達にプロポーズを受ける条件として，噂にしか聞いたことがなく，手に入れるのは非常に困難な珍しい宝物を持ってくるように伝えます。

石作皇子は天竺にある「仏の御石の鉢」を持参ということでしたが，大和国十市郡の山寺にあった古い鉢を持って行って，見破られてしまいました。車持皇子は「蓬莱の玉の枝（根が銀，茎が金，実が真珠の木の枝)」の偽物を秘密の工房で千日かけて作らせ持って行きます。翁はすっかり信用してかぐや姫ピンチ，そこへ報酬を支払われていない職人がやってきて嘘がばれ，なんともお粗末な結末。腹いせにその職人たちを後で滅多打ちにしています。阿倍御主人は唐土にある「火鼠の裘（かわごろも）（燃えないとされる布)」を唐の商人から高値で購入しましたが，それは燃えてしまった贋物でした。大伴御行は「龍の首の珠」を探しに，財をはたき行き先もわからず船出しますが，大嵐に遭い，さらに重病にかかったため諦めてしまいました。石上麻呂にいたっては「燕の産んだ子安貝」を取るために籠に乗って大炊寮の小屋の屋根に上ったところ，燕の糞をつかんで転落して腰を打ち，命を落としてしまいました。このうち車持皇子が最も悪く書かれています。

かぐや姫はこの 5 人に無理難題を吹っ掛け退散させ，この左右大臣を含む高位高官たちの失敗を嘲笑っています。さらに帝からの入内命令にも従わず，最後には武力にも屈せず，故郷の月へ帰ってしまうというたくましい女性です。決してなよなよしいお姫様ではありません。彼女は天上で罪を犯し地上に遣られ，それが許され月へ戻るわけですが，これは左遷追放されたけど後年恩赦か何かで都に戻られた公家のようです。そういえば光源氏も一時左遷されていますね。

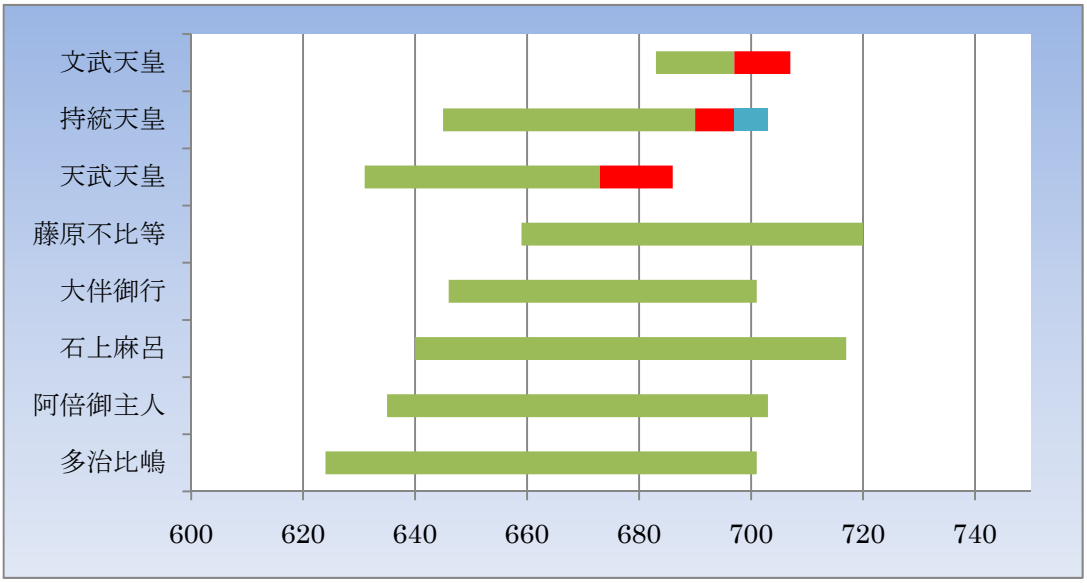
この物語の最後に重要な文章があります。

月へ還っていくかぐや姫は帝に不死の薬と天の羽衣，帝を慕う心を綴った文を贈りました。しかし帝は「かぐや姫のいないこの世で不老不死を得ても意味が無い。」と，それを駿河国にある日本で一番高い山で焼くように命じました。それからその山は「不死の山」（富士の山）と呼ばれ，その山頂からは常に煙が上がるようになりました。

実際，平安時代には富士山は常時煙を吹いていたことが知られています。

かぐや姫を入内させようとし，月へ還ってしまってからも未練心を抱いている帝とは誰でしょうか？この 5 人が都にいた時の天皇は天武，持統，文武ですが，持統は女帝だから除かれ，天武在位期に不比等はまだ若輩で表舞台には現れていない，従って文武（在位 697－707 年）しかありえません。かぐや姫が月へ還ってしまった日はこの在位期間の中秋の名月（旧 8 月 15 日）であることから推定できます。文武天皇は父草壁皇子が若死にしたので 14 歳で即位しますが，お祖母さんの持統上皇（645－703）が実権を握っている間は，光り輝くとはいえ，どこのだれかわからない田舎娘を宮中に迎え入れるなんてもっての他だったでしょう。この帝は 707 年 7 月に 24 歳で亡くなっているので，問題の宵は 703 年（大宝三年）～706 年（慶雲三年）の中秋の名月となります。結局，703 年 9 月 30 日，704 年 9 月 18 日，705 年 9 月 7 日，706 年 9 月 26 日，この 4 つに絞られ，最有力候補は没年の前年の 706 年 9 月 26 日(日)です。

『竹取物語』の舞台はどこでしょうか？京都府南部（長岡京市，八幡市，京田辺市），奈良県広陵町，富士市などの候補がありますが，飛鳥藤原京に近いことから広陵町が有力です。最後に『竹取物語』の作者は誰か？空海，源順，紀貫之，紀長谷雄・・・多数の候補者が上がっていますが，藤原不比等を嘲笑っているからには，藤原氏に恨みがあり，仏教･道教･漢籍･和歌などに精通し，もちろん文才もある人でしょう。そこで紀貫之（866?－945?）が最有力候補になっているそうです。紀氏は古来の名族で，彼は『古今和歌集』の編者，『土佐日記』の作者としては有名ですが，位は従五位上-木工権頭（いわば営繕課長）という冷や飯食いだったそうです。そういえば彼のいとこの紀友則の有名な歌「久方のひかりのどけき春の日に　しづ心なく花のちるらむ」（百人一首）は「桜の花が散るのを悲しんでいるというより，桜の後に藤(原)の季節になることを嫌がっている」ように思えますね。



赤色は天皇在位期間　水色は上皇期間